

2025(令和7)年度 総合型選抜

2次選考 基礎学力テスト

地域創生学群 小論文

【注 意】

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 試験時間は12時30分から13時30分まで(60分間)です。
3. この問題冊子は表紙以外に6ページあり、解答用紙は1枚、下書き用紙は1枚あります。
4. 試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
5. 解答はすべて解答用紙に記入してください。
6. 受験者本人の特定につながるような氏名、住所、学校名等は記述しないでください。このような解答があった場合には採点されないことがあります。
7. 解答用紙を持ち出してはいけません。持ち出した場合、試験をすべて無効とします。
8. 試験終了後、問題冊子および下書き用紙は持ち帰ってください。

問題 以下の文章を読み、「頑張る」と「支援する」ことの関係性についての筆者の主張を400字以内でまとめなさい。

子どもの頃から「努力すれば報われる」「やればできるんだから頑張きなさい」とよく聞かされてきました。今、人の親の立場になってみて、この言葉は子どもにやる気を出させようとする大人の浅はかな魂胆のような気がしています。そうやって子どもにコツコツ勉強させようとするわけですが、ほとんどの大人は、子どもの頃から毎日コツコツ勉強した経験は少ないでしょう。一方で、子どもにはコツコツ勉強して欲しいという気持ちから、子どものペースや能力をみずに「やればできるから頑張きなさい」と押し付けてしまう。もちろん実際にやればできる子はいますし、そう言われてやる気が出て報われる子もいます。「やっても無駄」とネガティブに考えるよりはマシかもしれません。しかし、ここで言いたいのは、そもそも“やれない子”“頑張れない子”がいるということなのです。

私が以前勤務していた医療少年院は、そういった少年たちだらけでした。彼らは認知機能の弱さもあり、“頑張ってもできない”が子どもの頃から染みついていた。何度も何度も挫折を味わい、既にやる気を失っていて、もう頑張れないのです。

頑張れないのは認知機能の弱さだけが理由ではありません。やってみたい、頑張りたい、という気持ちは自己実現の欲求でもあります。心理学者のアブラハム・マズローが提唱した欲求の5段階説によると、最終段階である自己実現の欲求は、“生理的欲求”“安全の欲求”“社会的欲求／所属と愛の欲求”“承認の欲求”の4つの欲求の土台の上にあるとされています。頑張りたいといった自己実現には、この4つの欲求が満たされていなければならないのです。非行少年たちの家庭環境はお世辞にも恵まれているとは言えません。これら4つの欲求の土台が満たされていないケースが多く、そういった場合はそもそも頑張る気持ち以前の問題があるのです。

色んな背景をもった人たちに対し一律で、「努力すれば報われる」「やればできる」といった言葉かけをすることは、どれだけ彼らを傷つけてきたことでしょうか。また我々も「努力すれば報われなければならない」「やればできなければいけない」といった呪縛からいつまでも解かれない状態なのです。頑張ってもできない人、頑張れな

い人たちの存在についてしっかりと向き合っていく必要があります。

「頑張ったら支援します」

「やる気のある人を応援します」

「努力した子を褒めましょう」

「夢に向かって頑張る人を応援します」

こういった言い回しやキャッチコピーをよく見かけます。これらの言葉かけは一見温かみのある親身なものに思えます。「どんな人を応援したいですか？」と聞かれれば、「コツコツと努力して頑張っている人」と答えたくなる方も多いでしょう。そうなのです。我々は努力して頑張っている人を応援したくなるのです。

しかし、一方でこれは、ある意味次のような条件付きの支援を出していることにもなります。

「もし、あなたが頑張ったら、支援します」

もしこれでピンとこなければ、支援や応援をお金に置き換えてみましょう。「もし、あなたが頑張ったら、支援金 50 万円差上げます」としたらどうでしょうか？ ぐっと現実味を帯びてきたのではないのでしょうか。支援金、奨励金というものがあるくらいですから、支援や応援は気持ちの問題だけでなくお金に置き換えても問題ないでしょう。「ほんの気持ちですが……」といって謝礼を渡すことは、相手に感謝を伝えたい気持ちの現れですので、決して失礼なものではありません。大学でも成績優秀者のための奨学金制度があります。これをどう感じるでしょうか。

頑張っていない人より頑張っている人を応援したくなる気持ちは分かります。しかし、ここで考えてみて欲しいのです。では“頑張らなかったら”どうなるのか、と。

「頑張ったら支援します」は、

「もし、あなたが頑張らなかったら、支援はしません」

「もし、頑張らなかったら支援金 50 万円は差上げません」

という意味にも取れます。これらの言葉を文字通りとれば、相手が頑張らなければ支援や応援をしないことになります。当然と言えば当然かもしれません。しかし、同時にこれは、支援が必要な頑張れない人たちを突き放すことにもなるのであり、結果的には、そもそも頑張れずに困っている人たちを見捨てることにもなり得るのです。つまり「頑張ったら支援します」という言葉は、時と場合によってはむしろ、条件付きの厳しい言葉がけにもなり得るのです。

そもそも条件付きの支援は好ましいものではありません。例えば小さな子どもに「おもちゃを買ってあげるから頑張れなさい」と物で釣っているのと同じです。子育てに物で釣るといったやり方が好ましくないのはお分かりかと思います。

一方で、世間では“頑張らないで生きよう”“もっと手を抜こう”“嫌なことは我慢しない”といった趣旨のキャッチコピーもよく見かけます。

これにはいつも違和感を覚えます。こういった言葉は、そもそも頑張ること、手を抜かないこと、我慢することが前提であり、それまで頑張ってきた人たちに対する^{ねぎら}いの言葉かけなのです。額面通りに受け取る言葉ではありません。

しかしこうした言葉を、頑張れない人たち、頑張れない子どもたち、また彼らを支援する人たちが、誤解して受け取ってしまうこともあります。特に、学問を楽しみたいから勉強をやっているという子どもたちは少ないと思いますので、彼らはさぼれるお墨付きをもらったと思いこみ、勉強しなくなることもあります。

また、苦手なことをやらせたら^{かわい}可哀そうだから……、と支援者が勝手に考え、本人の意向を確かめずに、可能性があるのにそれ以上やらせないことで、本人の可能性を奪ってしまうこともあります。

では頑張れないとどうなるか。ここで大切なことを確認しておく必要があります。“頑張らない”と“頑張れない”の違いです。

“頑張らない”のはわざとやらないといった意味に取れます。怠けている、といった印象ももたれるかもしれません。一方で“頑張れない”という言葉はそもそも頑張ること自体ができない、と取れます。例えば、うつ病の患者さんですと、頑張れすぎ

てこれ以上頑張れない、といった表現もなされます。このような人たちに、怠けているなどといった発想は^{はばか}られます。

ところが、外見から判断できない場合もあります。見た目が普通に見える人が“頑張れない”と言っても、どこまで理解されるのでしょうか。“頑張らない”と“頑張れない”は他者からは分からないのです。これは本人しか分からないことですし、本人が決めるべきことなのです。

しかし、社会はそんな違いに容赦はしません。頑張っていないと、頑張れるのに頑張っていないとみなされ、誰も好んで支援はしてくれなくなります。それどころか、やる気がない、怠けている、いつも口ばかり、といったネガティブな烙印^{らくいん}を押されてしまうのです。

しかも社会では、人を頑張らせようと色んな声かけがなされます。もちろん悪意のあるものではありません。しかし、やる気を出させようと声をかけた一言が逆にやる気を奪ってしまうケースもあります。例えば、「君の力はそんなものじゃない。もっと頑張れるはずだ」といった声かけです。一見よさそうに思えますが、“もっとできるはずだ”といった過剰な期待が相手にプレッシャーを与え、相手を追い込んでしまう可能性もあるのです。こういった逆にやる気を奪う余計な声かけは、我々も知らず知らずのうちにやっている可能性があります。そのような場合、“何も言わないこと”が相手のやる気を出す最大の支援になったりします。

そもそも頑張れる人は、他者から言葉をかけてもらわなくても一人で頑張れる人、つまり支援が要らない人なのです。

では、頑張れない本人自身はいったいどう感じているのでしょうか。無理しなくていいからと言われ、それで本当に楽になるのでしょうか。本当は頑張って周囲から認めてもらいたい気持ちはないのでしょうか。もっと自分を分かってほしいと思っていないのでしょうか。そして頑張れない人たちは本当に頑張れないのでしょうか。

これまで自分でも無理だと感じてきた非行少年たちが、あるきっかけで想像もつかないような頑張りを見せたりすることがありました。彼らが真に欲していることを知れば、彼らもまだまだ頑張れるのです。

では、本当に支援が必要な人たちとは、どんな人たちなのでしょう。ずばり申し上げますと、私たちがあまり支援したくないと感じる人たちなのです。

そういう人たちは、頑張れないために、なかなか物事を達成することができません。そのため自信がもてず“また叱られた”“自分なんて駄目だ”“どうせみんな自分のことをバカにしているに違いない”とネガティブな思考、被害的な思考に^{おちい}陥っていることもあります。彼らは魅力的に見えるのでしょうか。子どもの場合はもっと分かりやすいでしょう。被害的になっていると、友だちから親切に声をかけられても“またバカにしやがって”と手が出たりすることもあります。

また大人に対しても“こんな何もできない自分でも見捨てないだろうか”との不安から、色んな不適切な行動を展開し、“試し行動”を仕掛けてきます。これらは大人にとってたいてい問題行動に映ります。嘘をつく、お金の持ち出しがある、暴言、暴力、万引き、夜間徘徊^{はいかい}などです。こういった行動を繰り返す子どもたちを真から理解し支援しているプロの支援者も大勢おられますが、普通はやはり“厄介な子ども”に映るのではないのでしょうか。

そして、そういった子どもたちは、大人になるとますます理解されにくくなります。頑張っていないのに文句ばかり言ってくる、クレームばかりつけてくる、他人ばかり責めているように感じられる。そんな人には、支援してあげたいというより、あまり関わりたくないと感じる方が普通なのではないのでしょうか。

虐待する親のケースも、その類かもしれません。そもそも何の罪もない子どもを虐待したりする親へは、怒りの気持ちが湧いてくるのが当然かと思います。しかし、子どもたちのためには、虐待する親こそ支援の必要な人たちなのです。ここはジレンマの生じるところでしよう。

ではどうやって支援するか。これらは一筋縄ではいきません。でも工夫の余地はあります。頑張れない人でも、うまくスイッチを入れてあげると、想像ができないくらい頑張れることもあります。また周りにいる支援者からの承認で自信がつくこともあります。

支援し難い人たちを支援していくために最も大切なことは、支援者自身が頑張ろうという気持ちを持てることです。少年院では非行少年の保護者たちが年に何回か来て保護者会を開いたり教官と話したりする機会があります。保護者支援が大切と言われますが、一番の保護者支援は保護者自身に、

“もう一度この子のために頑張ってみよう”

と思ってもらうことです。

そのために“子どもの問題点を伝える”“親の教育法を否定的に言う”“こうした方がいいと指導的に言う”というのは全くの逆効果で、保護者はますます自信をなくし、やる気を失ってしまいます。そうすると少年が出院しても積極的に関われなくなるのです。ですので、保護者には「子育て本当にご苦労さまでした。大変でしたね。これからは（しばらく少年院にいる間は）我々にお任せください」と^{ねぎら}うのです。

これまで子どものことで学校で謝り、近所で謝り、警察で謝り続けてきた保護者が、少年院の保護者会で“また叱られるのか”と思って来たところ、^{ねぎら}いの言葉をかけられ、丁重に扱われたことに驚かれた方も少なくありません。そして、面会に来るたびに、保護者に対して礼儀正しく感謝の言葉を述べるようになった我が子を見て、“この子のためにまだ何かできることがあるのではないか”とまた元気が出てくると語る保護者もいます。保護者は頑張れない人と共に生きる人たちと言えます。

（宮口幸治『どうしても頑張れない人たち ケーキの切れない非行少年たち2』による。ただし、出題に際して原文の一部を改めた。）